

特57

537

俳優評判記

全

俳優評判記第廿二編序言

史記の月且評源氏物語の雨夜の品定共
に和漢の評判記にて其趣旨の異れと善
と惡とを分ツの一なり評すれ共黑白の
判あらず判すれ共記するなきの所謂小
田原相談の決し難き等類にて眞の公評
とするも足らず昨日の東棧敷の後に立
で成田屋と叫び今日西の棧下に潜て
音羽屋と喚き何方附かずの電光組或の
追込の各自評に入兵衛が可也として日
本一大黒柱と譽る者の吞太郎反て之不
可と貶め異太根体を見ろと罵番端番の
制聲に應せず此徒の善と稱し惡と誹る
所ろ蓋し一時の好憎にて眼中黑白無差
別と度外に束閣公評眞と極る者の第一
に私情を棄愛着の念を斷懸意の好意よ
彼役の毫不承知の廉もあれを一番最負
に張込で賛成てやらすの成まの或
の伎の可也すれと平常の容子が氣ふ喰
とねば序から切まで嘔吐の如く誹謗い

ふてごまさんきんを有心故造の説を成
す共活眼看功者の評する所る江湖眞の
演劇見物左衛門の衆議ふ附さ本珊瑚
の色薄きと明石玉の色濃くと混じ錦又
包む夜光と以て金箔泥の炭團とを豈同
一視すべけんや六二の連長高嶽翁毎次
梅索薫氏と相謀り観劇の大通子等が投
書に依て協議再三その投票の多数に決
し這般も又此記述あり高翁三十餘年來
各坐興行の都度観て洩さずと然れ共評
に獨斷あく判に專擅あさの余輩が万々
保するありと牡丹餅程の判を捺て當編
の証人酔て管を巻が如し
當年積つて明治十六舊例の顔見せ月
新富町の劇場河岸にまばらく寓居の
鯨にあらぬ平民の愁栗坊主

赤本入道 假名垣敬白

○新富座俳優評判記

廿二號

十三鐘
絹掛柳

妹脊山婦女庭訓

四段目の切迄

淨瑠璃
道行

戀の芋玉巻

中村 芝翫
助高屋高助

市川團十郎
竹本連中

一久我之助清船
一漁師ふか七

市川左團次

買の金輪五郎今國

○久我之助清船役此若衆形の今回の妹脊山中でのお景物
最早余程トウが立てゝる故如何な物かと存升たが遠い年
功中々宜まきされ升た拵へ万端分ちく口合手の離鳥が
何しかふ(福助)丈故定て釣合がと思升たに相應ふ似合ま
したの甘心口併し本人の迷惑かと思ふ振事も見えし此
方の氣の性か○太神宮へ朝拜せんと柏の若葉摘取てト
柏の葉をちぎつて水へ投込升たが爰(故半四郎)の時ハ
扇面の上へおせて祈請してハッノと流され升たがあの
方が風情が有升る○腹切に成てゐらもや分の處無何の然
れ謹んで仕られし故見悪い處も有ましきんだ
○漁師ふか七此役の昔より名人上手の仕残された大役は
て紋切形の種々残してゐる六ツかしい物故(廷升丈)初役

新富初シ

と云如何な物と待て居升さか先此丈の跡に有はまり役故
 中名評の能ふり升た○拵へ万端分あし上使の間随分手
 丈夫に遣れ升たが入鹿の何しおふ(團十郎)あり今一息思
 つたふと云欲目が有升た○此丈の近年メキくいと藝道仕
 上られ先誰が目にも(左國次)の上手あ成たと云高評ある
 が新狂言で育つた人故堂も時代物へ掛ると少し器量下
 りのせんかと思ふ處有ですが衆さん堂です○イヤ誠に愛
 らい名論でムり升ふ記者も同意く○ふか七の眼目と
 云昔から種々振事の有イヤ又評言も有處のガノ大小を
 投出し「あだ面倒おと椽板へぐたりと鳴の相圖かと突
 出鎗の之の薄」ト下家鎗の出る處なるが此丈の無造
 作に引摺み折ばしよつて捨入鹿の疊臺の上へ上向に寐ら
 れ升が(尤も此疊臺へ寐る事の後にやめに仕られ升さ)此
 疊臺の上へ寐るのの能思ひ付あり何は大勇でも鎗の出る
 上へ直に寐るとい余り芝居過升が是でい大丈夫と思われ
 升て○銚子の酒と櫛す處も分なしあみわの殺しか物語
 りの處も花やかにて能ムり升た口さす一升よこされたとい
 言れ升たがおこされたと言てはしあつた先何の角のとヤ
 物の方今のふか七でムり升ふ大出来く

一侍女菊の局

岩井紫若

○此役の御殿を立派にする迄の五馳走五苦勞く

一侍女櫻の局

市川團右衛門

○此丈の堂見ても男の様あり不感心く

○三立目に入鹿の代り役さして出来した處あし

一ふし元桔梗
 一宮越 玄蕃

市川八百藏

○玄蕃の思ひの外出来よし

○こし元桔梗の可笑い少あいげれど男前よしキザケの
 かし當りの部あり

○侍女紅葉の局(門藏)市村座初日に成てから代り升藏が
 勤め升た枕の局(猿十郎)白髪のお女に作つた何だか不
 請あり同楓の局(荒次郎)同柳の局(團八)右何れも趣あ
 つて出来升た五苦勞く

○三立目太宰の館受領の場○鹿島の事觸(猿十郎)○願人
 坊(喜知六)後(尾登五郎)○神子(團八)○猿廻し(升藏)
 ○淨るり語(小半治)ごみ太夫(左伊助)○座頭(左伊三)○
 赤坂奴(咲松)等なり何れも振事相應にこあされ升た

一太宰の息女離鳥

中村福助

○一荒巻 彌藤治
 ○壽座で評の宜りし八重垣姫より今一段大出来なのい今
 回の離鳥あり品柄と言容貌と言拵へ万端分なく仕打も

中々能くあされ升た○八重垣姫よりの荷が軽く夫故十分
あ當り目が見へたでムリ升ふ殊も(三升)の合手故定先で
指南の夕處も有と見得愁も苔へ大出来でムリ升た口是で
調子が直ろう物あら大した娘形でムリ升るて

○荒卷彌藤次の此丈が勤めらるゝ故道に白首で仕られ升
たが立役の立番の随分珍ら敷事是も役者の都合よよつて
お問あ合せあきばよん處あしか

一入鹿妹橘姫

助高屋高助

○戀の芋玉巻の道行よりの出拵へ万端分あく此丈の年
功に成てから美しく成今回の姫のめつ相な上出来ぼんや
りとして色氣も有諸事大鳥にて品格備のり先方今此位な
お姫様の外も有升舞口合手のおみわがとす葉お能くあさ
れ升故猶々橘姫の上品が引立升て一をい能見へ升た○そ
もじとでもたらちねのゆるせし中でも無からの戀仕が
ちよ我殿の振の處の云への程宜つたく○同じく御
殿の場立飾つた相圖の礫を打處菊の花を折てはうられ升
たがあれの一寸色氣を付た物かやのり通常の礫の方が能
ムリ升ふ○求女の手には掛らんとの覺悟の處より奥へ忍び
込こあしの處迄分無道行の近年の當り物で有升た甘心
○歌女之亟こし元小菊役まつとりと宜出来升た受領

に春駒美しくて上出来

○まげ松侍女つゝじの局此役の女形の局の中へも交り又
加役の局の中へも交つておみわをいじめる事も仕あされ
升たがいかに年を取たも若女形本分の身で有ながら委
細構のす勤められ升たの大きお遺憾我輩記者杯も斯様な
ヤケ事とされるの大き承知な義と小言が云度あり升口
イヤ又會計づも有升ふから大目に

○官女の内に(登美松)もこ入て居升たが市村座初日後(升代)が代て勤られ升た

一侍女竹の局

澤村源之助

○お附合五苦勞さまく

一侍女梅の局

中村 霍 藏

○さて何と云てもいかにも枯て甘いこの此丈の局でムる
て只わけもあく仕て居うちに可笑味が有て第一等の出来
實に此丈で持て居升た甘心く

一侍女柏の局

坂東 老 調

○局のお勤にて五苦勞さま

○三立目花渡しの定高の代り役別に出来した處もなし五
苦勞様

一侍女松の局

市川 海 老 藏

○局のさしたる事あり○花渡しに大判事の代り役のさし
て出来も無五苦勞さや

○大判事清澄

中村芝翫

一おとしたおむら

○鳥帽子折求女

○大判事役拵万端紋切形にて十分無花道中程にて例の通
定高との出合の處ハ随分の長せりふ故後見にて付て貰ふ
事も成まい七堂なざるかと思ひしに美事立派に遣て退ら
れ升たの此丈にしての感心(併しせりふを澤山抜にしら
れ升た)此丈の振事ハ始終仰山にてトント探人形の様
で公はが此丈にしてのよん處さしか久我之助ハ服と切離
鳥死しておらの大泣定高との出合の處余り泣過て頑盛
親父との見へ殊に紙が裂か杯で涙を拭て居れ升たが女
を敷見へて不感心何ば腹の無人ありとて爰らの注意して
やしふムり升の併し貫目の有人故見劣りの割にハ無様で
したの遠く(福助)丈の本首と遣のれしハ五注意く
○鳥帽子折求女役久し振での濡事師如何と思ひしに遠の
トントで叩き込込人故肺のよあしハ申分の處なし近い
處で看れば容色の老たるアラも見ゆれ離れて見れば一點
の半分も見出升んでした拵へ万端昔からのお詠へ通り
○今回の呼物の一役あるが當り物の部

○おとしたおむら役是の此丈へふつ付の役拵へ万端好よ
く向しある踊の有人故輕い事く可笑も十分有て大出来
見物ハドット云升た愛敬者く

市川團十郎

一太宰後定高
一杉酒屋娘ハ三輪
一入鹿大臣

○後定高役今回初役あるが是迄宮内の局や八聲の覺壽
を出来してゐる故大丈夫と存升たが案の上古今の犬出来
拵への是で見馴て居着附どのグツト手換て檜皮茶の
着附に襦袢ハ飛色地へ萌黄の破れ菱は白の乱菊の荒い織
物にて昔から誰が演ても茶か御納戸の着付に同じ色なる
小摸様の純子杯が通常あるに(三升)のハ余程派手成好み
成が左までに見悪くも無見へしハ不思議口投書にも難も
無江湖の噂も耳へ聞込升んハ全く釣合能もの見へ升口
花道の出に大小を帯ハ本文おれば通常あるに侍女升代を
供に連是に刀と持せ自分ハ差添斗り帯て居れしハ五尤な
る好也口大判事のせりふ聞て居内脇へ向耳を向ふへ向
てゐる何となふ昇ムり升た○離鳥に入囚の事を言助が
處も吉後娘の髪を結直し離の首の落てからの愁ひ十分に
答へ升た合人の離鳥どのつり合能先近年での妹山でムり
升ふ口姫の首討時襷掛成るハも吉後に此襷を取て直に

腹へふるも請升た○首討時屏風を引廻さるゝの宜つた○
 取分て答へ升たの雛鳥の首と抱へて庭へ下り立「大判事
 様分て何もや升ぬ」と言處愁をふくみノリ地に成處の
 實よ甘伏○今回の新案にて道具流しに成と一同後ろへは
 入正面の突出した岩の上に子役が代りて瀬を見て川上の
 ら流して向ふ岸へ付ると言五趣向實に斯して見せるの五
 尤も仕來り通で川と横に道具が流るゝ道理も無劇場で
 みるから堂でも言ば言ものゝ物をかけて斯して見れば休
 裁がいくもと感し升のら此場に成と場中シヤノと首
 しも断りあり念の入たの同じ道具が二通り入譯實に斯様
 亦事の外座での出来ず新富座に限る注意あり口是だから
 機敷代の高價も尤も○是より段切まで自分の處を先貞
 高の方今此位に演て見せる役者へムり升まの大當り大出
 來口團十郎はじめ此妹春山へ出る役者が皆ノ久我之助
 を久我と言れ升様あるが是の久我と書て久我と讀が本文
 あるふ東京の時代狂言の流行せぬ處故爰らに氣が付ぬ物
 と見へ升の遺憾亦事でもらて

○記者も評に苦しみ升るののみわの評言あり毎度六二連
 の團十郎最賃で例でも(三升)斗り譽るから不感心甘い物
 の中から味無處を見出す處が評者だとい此れがムり升る

故今回の何でも悪い處を見出して書升ふと存升たが何分
 見へなくて困り升た定で惚て居ばスバチも笑窪と見ゆる
 のだと仰有かも知んが投書の内にも悪いと云評言あし
 六二記者へ見功者連の投書家もゴマか知んよされば是
 より譽る事に取掛り升ふ○見ぬ先に何は何でも近頃成
 田屋が女形を度く演が昔より六ヶ敷物と極先て有娘形
 の天狗物お三輪のと人も言我等もやた事成が初日を待兼
 て見物し升たが先ノツケに道行の東の揚幕から出た處を
 見ると驚入升た牀の振事堂しても娘形に相違なく殊に
 拵へも彼は心配なく萌黄の石持お十六武藏の裾もやう好
 み分分なく口立役が女形とすると腰から下が女おならぬ
 物にて不承知なるは腰より下がいかにも振よく何共言ぬ
 程お形ちよく是の忍入升た○此丈の養父權之助に賣ら
 れ子役の時分に西川の門へ入て踊りを苦しみ成長した人
 故全体利口振て踊る所作でなく確りと答へた處の腕前が
 有故と思われ升た(因に記し升が本人も親の有難さが今
 む至つて顯れたと樂屋の人に咄されたこの事)女庭訓
 仕附方よふ見やしやんせの處に分て感伏でムり升た口本
 花道へ掛り轉んで芋玉巻の糸が切て後追ふての引込の振
 へ甘りつたノ御殿の場おとしたよ逢求女の事を尋る

處おひらが「チ、く」来たげなく、夫のお姫様の戀男じやげなの云々ア、宵の中内祝言が有等と」聞てから最早腹の内に格氣を起し奥へ斗り思入有ておむらに最早關係せぬ處の請升た口紋切形の通り官女大勢（今回別て八人）あいじめらるゝ處間が透かす奥へ斗り氣を取れてゐる處の感心く「口今回の官女の例もと違排の袴斗りでなく小内着どう云物を上へ着くつた例の團州の物好のよし〇竹に雀の振事の甘い物でムリ升た「コ、ナはてつをらめ」ト云時振袖にて（荒次良）の天窓を叩かれ升た可笑の去り升たが無もがあと思ふ當込でムリ升た〇是より嫉妬の處爰に成たら最早大丈夫と思ひ升た見ぬ先の想像ある故返て道行から竹に雀までの處が大出来にて悪くは無が此處にあつて左程に思ひ升ぬと云りおもひさやでムリ升た「這ひ過る手おだ巻の此主様に逢はれぬか堂を尋ねて求女様」の處おだ巻を抱て落入處の實に感伏し升た〇サテこんなに乗て記立あるが肝心な色氣の堂ですあ〇イヤ五尤も夫の早本職の女形でなく長編袴の常に脱ぬと云正眞のお山さんが演るのでなく荒事がお家にて實惡の吉武道も有お婆ア三の久藏母和藤内母と出来七親父役の權四郎掃部頭が大當りと云俳優おれ色氣

がボクく落ると云譯ふ行ぬが先堂か斯か有様なりしがそこ迄十分あらば神變自在とも云す成升舞から五掛辨く

〇お三輪を前後お見せ中へ挟んで入鹿大臣の役此二役の昔から折々出升物めて故成駒屋歌右衛門此丈の兼ト云紋看板を上げた人にて二役演され升たが入鹿の手の物おみわの舞りの上手ありし故返て退られ升たが地体肥た人にて格好悪く其後故嵐璃寛（今の璃寛の親御）も演られ升たがヤハリ肥た人にて見ぬ眼が悪く此丈の女形でたゞさ込だ人ありしが余り感心し升んでした〇團十郎の例の好事故紋切形の拵へを直して仕立され升た髪は物髪に髷と長く延して作られ升たが此淨るり院本の序切を見升と親殿夷子に腹切せ入定を出て謀反を顯す處の文句に「髪のおどろよ麻衣さもすさましき有髪の僧形と有升處と見れば今回の入鹿の作りの尤もに思れ升〇仕打の此丈の事を賢まおみわを勤る同人とい見へ升んでした大出来く

御最負様より
御好に任せて
神靈矢口渡
第四段目の切

一渡し守頼兵衛 市川團十郎

○此矢口渡の狂言の江戸作の淨るりにして福内鬼外の名作あり(俗名平賀源内有名の風來山人の事あり)哥舞妓座で演され升たの近くハ七代目團十郎(團州の實父)が天保二年五月木挽町森田座にて始て興行の處古今の大當りなりし其時の役割ハ頼兵衛(團十郎)おふね(澤村訥升)後助高屋高助(今の高助の實父)六藏(市川壽美藏)中山富三郎(改名)○其後天保十二丑年五月森田坐頼兵衛團十郎改(海老藏)義峯八代目團十郎おふね(岩井杜若)○昨年故人にあられた半四郎のちぢいさんなり六藏(大谷万作)其後ハ(海老藏)御赦免後歸國にて猿若町河原崎坐頼兵衛(海老藏)おふね(岩井杜若)後半四郎六藏(九藏)後團藏今ハ九藏の實父あり此時ハ海老藏入齒を取て演られ博奕咄しハ所杯古今の面白味でムリ升たされば此狂言ハ市川家の物の様も成て居升事あり成駒屋歌右衛門も演れた事が有升が筋へ手を入て余程違へて仕られ升た○今回久々あて出升て評判でムリ升た拵へ万端先規通りあて吉白髪かつらハお詠への銀細工是も先代の好とありまつかりハ兵衛(猿十郎)二どろのびん助(荒三郎)三上の重次(喜知六)後(斬太郎)勤る三人金の無心に來る奴ハ二百両ッ、

貸て遣是より金持よ成た手柄咄し新田義興を討た事を博奕によそへて咄す處が頼兵衛の見處あるが此丈極手輕くして待む待た甲斐もあく今一息花やかあ仕られたらと云仕打あり村の歩行が迎に來るに六藏に留守の事を云付出て行るゝ處分無口ぬつと出たる主の頼兵衛と云處ハ二日目出幕の日にハ人形身でする筈にて一日仕られ升たが堂か工合が悪いとて止られ升たが七代目も人形身あるんぞハ仕升んでしたから癪に成たが上分別ハ仕て見れば恐く云るゝが落和三郎の方が甘い杯と云るゝハ見え透て居升とさぐりあがら寫坐敷の下家ハと入邊越お自刃を突上る處のさしたる事あり○是ハアツト云盤を聞かけ上つて見れば手を負しハ娘おふねなるに驚く處よし口おふねが我身の痛手をこちハ異見するも聞入ざる強情の處ハ手丈ハ夫に能まあされ升た爰らハ外に仕手無感心ハ○義峯ハ娘が落し遣りしと聞くやしが相圖のゝる火を上て跡追掛んど下手へ遣入らるゝ迄分無下ハ上手ハ小舟に乗て出る處舞臺の真中にて空中ハ白羽の矢飛來て射伏らるゝ處にて幕爰の處ハ評する處もなし一体に狂言を派手にあハさらぬ性故時によると今一息堪能せぬ處が有升ハ毎度の事ありとて爰が斯と云ケ處も無でぞから懸いと評す

るでもなしとて方今外に仕人も無とまり役申分無と云て置升ふ○妙を物にて全くの富り物の江湖で騒ぐ物ですが頼兵衛の事の世評に彼是の高評なしされば大當り大出来といやせぬ評あり

一船頭六藏

市川左團次

○此役の大立者が演る程の役でも無が(團藏)が仕られし故大物に成たと見へ五愛敬がてらに勤められ升た事なるが非常に安く仕られ大膽でムリ升たがおふねに欺され女夫にならふと云る、時婚しがつて懐るへ手を入前の物を帯へ挟む機な仕打をしたが花道の引込際に前の處を叩いて氣の早い奴だと云振事と仕られたので大層器量と下られ升たかやうな事鈍痴氣請ひし升がお綾敷請ひ無物です圖に乗て此機を事をさるる己來癡止にさされ口花道でカツボリの様も事を長く仕らるるも大不承知のおふね太鼓の場立廻りのさしたる事なし何の然れ一体批評判の宜い兎も角もお仕合

一けいせいとうてき

坂東志郎調

○拵へに付種々を評もムリ升たが昔よりの好み故思いと云も氣の毒一通り吉とやて可あらんか口白旗を隠居へ掛るの世を忍ぶ身か如何と有升たが六藏に見留らるる種なれば是あるか

れば是あるか

一新田義峯

岩井紫若

○此丈の持前の女形の時の色氣が薄いが義峯杯の加役を仕なさると随分可成に色氣も有升自由にさらぬ物あり拵への方今の目にいとまらぬ處有でムる緋の縞袢外色で如何と云投書がムリ升た○仕打の分無突然おふねお惚られ迷惑がる處も吉

○まづかりは兵衛(猿十郎)○二どろのびん助(荒次郎)○三上の重次(喜知六)後に(翫太郎)何れもさしたる事をし○船頭(升藏)六藏をひかひよ来ておふねと間違らる、可笑さしたる事あり○(八平次)の村のあるさ出来よし

一娘おふね

助高屋高助

○此丈の近頃女形斗り演され升が又妙に出来れ升て評判が宜ムり升今回のおふねも一番目に(三升)のおとわが有故に此丈の娘方のぼつとりと色氣の有處が目立升て此役の中々の上評でムリ升た口義盛にうてあの事を尋ねお内儀さんでいムんせぬかへと云處のおどけなくてよし○拵へ万端分ちし手負に成爺親を異見の慮愁十分に答へ升た口頼兵衛を送り出る時刀を持って来られ升が最り少し重さうと取扱つて貰ひたし口近年女形でゴコが出来て

ムる故立役がふねの加役を任られて最早誰もお景物
共思の普通常と思ふ様にうり込だもおかし悪事を思ひ
留つて呉と云て口解時頼兵衛の膝を抱き付處のいりにも
親子の情見へて宜ムり升た○こまかく評する處も無です
が一体におふねの請升たやうに大出来く

○第二番目狂言役人替名

是の昨年梅幸が彼地で聞し油屋の十人切の實説を日記へ
留し伊勢土産小島の立場で千次郎の金を盗し旅持野寺の
兼を捕へし市藏夜目にも夫と宮川で調度出會し福岡が後
日の證據の極印其金故に質入せし青江の刀を右太夫
が知て巧し刀劔會夫のせつをに請戻せしお崎が實意を興
左衛門が異見の種に芝居茶屋深き仕組の狂言と知すおこ
んと小座敷で泣の泪の縁切に我紙人へ入れし目貫お賊
の汚名を受思はぬ難に藍玉屋岩次を初め万のが悪口忍び
難に清兵衛とあさしが詞に立歸り妻や妹に余處あがら
別れを告て恨みの仕返し血汐の雨の古市を遁れと鳥羽の
磯貝が諭しに貢が切腹の思と義理との二見が浦今や日の
出の藝妓か揃ふ踊りを秋の錦に比べ

千種花音頭新唄

五幕

- 一油屋の仲居万の 市川左團次
- 一磯貝與左衛門 坂東家橘
- 一松坂屋千次郎 岩井紫若
- 一油屋清兵衛 市川團右衛門
- 一與左衛門妻おとね 尾上松助
- 一藍玉屋岩次 市川八百藏
- 一福岡の下男正助 大谷門藏
- 一野寺の菊松 中村荒次郎
- 一松坂屋の手代市藏 市川團八
- 一磯貝の下男宗八 尾上竹次郎
- 一道端の胴六 市川升藏
- 一右太夫倅左司馬 坂東橘次
- 一茶屋の亭主才助 中村芝壽郎
- 一油屋の若イ者兵吉 市川左伊介
- 一同 仁藏 尾上音扇
- 一同 仲居花の 坂東八平次
- 一犬坂屋若イ者太助 尾上幸水
- 一小道具屋才兵衛 大谷門兵衛
- 一荷持重藏 尾上新助
- 一參宮の旅人久助 尾上幸水
- 一同 千助 坂東家久之助
- 一同 万藏 坂東家久之助
- 一漁師とば六 坂東家久之助
- 一同 岩藏 坂東家久之助

- 一同 沖八 市川 團子
- 一同 淺吉 中村 碓砧六
- 一 伊勢参り伊太郎 尾上 菊之助
- 一 油屋おさし 中村 福助
- 一同 小ぢよくまめ 大谷 友松
- 一同 ことぢ 市川 枇杷丸
- 一 いせ参り金太 市川 左喜之助
- 一同 土松 中村 仲太郎
- 一 河原の治藏 中村 翫太郎
- 一 油屋の仲居せんの 尾上 登美松
- 一 磯貝の下女おこま 市川 左代次
- 一 立場の下女おたに 市川 三筋
- 一同 おやま 岩井 老け松
- 一 大坂屋の女房おえげ 澤村 源之助
- 一 油屋おこん 一貢 妹お梅
- 一 藍玉屋喜多六 御師 津村右太夫
- 一 貢女房おさき 坂東 玄う調
- 一 山田の御師福岡貢 尾上 菊五郎

○序幕小幡小休處の場本舞臺立場茶屋の体爰に(相中)の旅人四人茶を呑で居る女中二人茶を出して居る下手に

菊之助(仲太郎)伊勢参りまで旅人に錢を貰事ある旅人衆々上手へは入向ふ岩次(團右衛門)喜多六(鶴藏)跡が仲居(登美松)ゆやめ付て出て来る皆く床机へ掛て咄して居處へ小道具屋(左伊助)出て来り岩次(團右)に後藤祐乘の金目貫を廿五兩賣事有岩次此目貫の油屋の亭主が望で居故是を種におこんと見請する下拵へと語り是より岩次喜多六兩人仲居兩人と連れて上手へと入○向ふより松坂屋千次郎(家橋)手代市藏(八百藏)供(八平次)何れも旅形出て来り此茶屋へ休む跡より野寺の菊松(松助)旅形にて出来り女中に四人連の同者を通り仕なかつたかと尋る事をしやに床机へ掛り腹の痛むこなしに病む是にて一同驚き市藏の革袋の内より赤玉と出して香せる是にて兼松の直つた振にて禮を云私し名古屋の者金兵衛と云小道具屋参宮お参り升て今朝から連みとぐれ升たと咄して居處へ下手より洞六(門藏)治藏(翫太郎)宿引の振にて出て来り宿を進める事あつて金兵衛を無理に泊様と引張金兵衛の強がつて此衆の連だと云て漸く断る是にて兩人の程よく上手へは入金兵衛の跡にては蔭さまにて助つたと禮を云千次郎の最早行升ふと云と市藏の小便に行て来るからと千次郎革袋と預け後ろへは入爰

へ(菊の助)(仲大郎)(左喜之助)三人のいせ参り出て来り
 錢の事にて掴み合の喧嘩に成大勢の是を止て騒居内へ
 松助)の草袋の上へ合羽を置いて衆と同じ様は喧嘩を止る
 振して能程に草袋を引抱へ上手へ逃ては入市藏の用場よ
 り出来り同じく是を止ト、いせ参りに錢を四百文遣り中
 と直させる是にていせ参り三人の下手へと入市藏のサア
 参り升ふ先刻の草袋と云千次郎の爰へ置たと云て床机
 の上を見る草袋あし皆も驚てさかす處あし是ふて心付名
 古屋の旅人が居ぬから取て行たお途無跡追掛て取換さう
 と市藏の上手へ走りは入千次郎の當惑して居る亭主の草
 袋の中の物を尋る千次郎の是に答へてあの中おの金の百
 五十兩あれぞ定家の御書が入て有京都の本店へ返す金で
 買れの品でふると咄し俱々詮議を頼むと云處ふて此道具
 廻る

○同じく宮川渡場の道具爰に兼松(松助)胴六(門藏)治藏
 (断太郎)草袋を改め悦んで居處へ下手より(菊之助)(仲
 太郎)出来り先刻の褒美を呉と云兼松の二百文遣(菊)(仲
 兩人の此錢を返して百や二百の錢を嬉しがつて貰て行お
 らつちじやアチへと一寸強面のせりふ有是にて兼松の能
 度胸だ末頼母しい能惡徒ふ成だろふと金を二歩出して遣

兩人の夫じやア取て置ふと兩人下手へは入兼松の内此
 金の分口をし櫛から夫迄の形にとは書を胴六に預ける(一
 門)(断)兩人の別れて下手へは入上手より市藏欠來り兼
 松に突當り誤りながら顔を見てヤアおのれのと捕へる爰
 へ跡より千次郎供も出来りとらへる供にの先へ往て宿の
 者を呼で来いと遣り是より兩人ふて兼松を吟味し後に裸
 ふして改める兼松の懐ろから股ぐらへ手て出し金を後へ
 出し足にて蹴飛し置裸に成るいくら尋ねても無兼松の承
 知せず人を盗人よしたと慎る千市兩人の詫入て居處へ福
 岡貢(菊五郎)向ふより出来り挑灯にて見付松坂屋様でム
 り升たかト云ながら兼松の顔を見ておのれの兼松と引捕
 へる是より兼松の挑灯をたさ落すさぐり合にて金をさ
 がす貢の刀の鏢にて兼松の額へ疵を付るだんまり摸様よ
 成上手より岩次の(團衛門)出来り是へはさまり蹶ひて轉
 び金包を拾ふト、(松助)の東の歩み(團右衛門)の本花道
 へ逃る(家橋)(八百藏)(菊五郎)の舞臺にて見送る見待よ
 て幕

○家橋松坂屋千次郎の拵へ木綿問屋の若旦那と急度見得
 升た旅形の拵分なし
 ○八百藏同手代市藏人品はまり半分無旅拵へ好相應なり

○八平次同供男の拵へよし荷物(荷物)が粗末(粗末)にて悪(悪)し兩掛(両掛)の柳(柳)をりて無(無)れ成(成)升(升)まい

○松助野寺(松助野寺)の兼松(兼松)評吉(評吉)名古(名古)屋(屋)者(者)の旅人(旅人)と云(云)好(好)吉腹(吉腹)の痛(痛)むと云(云)を種(種)に客(客)人(人)にたぐり付(付)掛(掛)梅(梅)例(例)赤(赤)がら(がら)く様(様)を役(役)の灰(灰)汁(汁)ぬけて甘(甘)い物(物)あり宮川(宮川)の場(場)も宜(宜)出来(出来)た

○團右衛門(團右衛門)徳島(徳島)岩次(岩次)の阿波(阿波)の藍(藍)商(商)人(人)にて得(得)意(意)廻(廻)りとの事(事)挺(挺)へが目(目)倉(倉)島(島)の脚(脚)半(半)足(足)袋(袋)麻(麻)裏(裏)草(草)履(履)と云(云)好(好)と堂(堂)か東(東)京(京)の町(町)人(人)が遠(遠)足(足)に出(出)たと云(云)拵(拵)へか又(又)いせげん(いせげん)の様(様)にて見(見)悪(悪)し何(何)とか好(好)が有(有)様(様)赤(赤)物(物)せりふ(せりふ)の内(内)に金(金)目(目)貫(貫)を買(買)取(取)て差(差)添(添)おやしいと望(望)て居(居)たど云(云)れしが侍(侍)ひの詞(詞)じみて悪(悪)し町(町)人(人)あら脇(脇)差(差)と云(云)たし(此(此)せりふ(せりふ)の云(云)ぬ時(時)も有(有)し書(書)抜(抜)おの無(無)事(事)と見(見)へ升(升))○鶴(鶴)藏(藏)藍(藍)玉(玉)屋(屋)喜(喜)多(多)六(六)拵(拵)へ岩(岩)次(次)と同(同)様(様)よて悪(悪)し仕(仕)打(打)り兩(兩)人(人)共(共)さしたる事(事)あり

○門(門)藏(藏)道(道)端(端)の嗣(嗣)六(六)宿(宿)引(引)と化(化)て來(來)た時(時)細(細)帯(帯)お半(半)天(天)の如(如)何(何)か併(併)し半(半)天(天)にて帯(帯)を隠(隠)し思(思)入(入)り有(有)たが宿(宿)引(引)と見(見)る奴(奴)の有(有)まじ○断(断)太(太)郎(郎)河(河)原(原)の治(治)藏(藏)同(同)じく宿(宿)引(引)に化(化)た悪(悪)者(者)此(此)人(人)の方(方)が能(能)か○仲(仲)太(太)郎(郎)左(左)喜(喜)之(之)助(助)○菊(菊)之(之)助(助)の伊(伊)勢(勢)參(參)り何(何)れも大(大)出(出)來(來)○登(登)美(美)松(松)の仲(仲)居(居)り帯(帯)の様(様)都(都)て西(西)京(京)邊(邊)の仲(仲)居(居)の風(風)俗(俗)よく摸(摸)されて感(感)心(心)○あやめも分(分)ちあし

○團(團)八(八)茶(茶)屋(屋)の亭(亭) 追(追)從(從)云(云)物(物)に掛(掛)たら例(例)でも出(出)來(來)よし

○菊(菊)五(五)郎(郎)福(福)岡(岡)貢(貢)拵(拵)へ万(万)端(端)分(分)無(無)今(今)回(回)の例(例)の貢(貢)と違(違)て惣(惣)髪(髪)に仕(仕)られたり御(御)師(師)と云(云)人(人)故(故)相(相)應(應)にて五(五)尤(尤)もあ(あ)り此(此)場(場)の幕(幕)切(切)へ顔(顔)を出(出)さるゝ迄(迄)評(評)する處(處)あし

○立(立)場(場)茶(茶)屋(屋)の道(道)具(具)女(女)郎(郎)の名(名)前(前)と印(印)た赤(赤)い送(送)り履(履)の受(受)升(升)た○立(立)場(場)の時(時)り本(本)花(花)道(道)が江(江)戸(戸)方(方)よて上(上)手(手)が古(古)市(市)方(方)の出(出)遣(遣)入(入)ありし宮(宮)川(川)の場(場)に我(我)と轉(轉)倒(倒)して花(花)道(道)が古(古)市(市)方(方)に成(成)て貢(貢)が迎(迎)に出(出)れ升(升)たの堂(堂)云(云)物(物)か方(方)角(角)が違(違)てチ(チ)ト遺(遺)憾(憾)でムり升(升)た

○二(二)幕(幕)目(目)古(古)市(市)地(地)藏(藏)芝(芝)居(居)茶(茶)屋(屋)大(大)坂(坂)屋(屋)の場(場)爰(爰)の岩(岩)次(次)喜(喜)多(多)六(六)がおこんおきしを連(連)て芝(芝)居(居)見(見)物(物)の場(場)喜(喜)多(多)六(六)(鶴(鶴)藏(藏))歸(歸)るゝと奥(奥)より立(立)腹(腹)して出(出)て來(來)るを仲(仲)居(居)(登(登)美(美)松(松))(あやめ)其(其)外(外)大(大)勢(勢)茶(茶)屋(屋)女(女)房(房)(まけ松(松))止(止)ても聞(聞)入(入)ぬ處(處)へおきし(福(福)助(助))出(出)來(來)り留(留)る是(是)にて喜(喜)多(多)六(六)シヤ(シヤ)く成(成)奥(奥)へ行(行)て香(香)直(直)さうとみちくは入(入)岩(岩)次(次)出(出)て一(一)昨(昨)日(日)斗(斗)らす宮(宮)川(川)で百(百)五(五)十(十)兩(兩)拾(拾)つたと種(種)に金(金)櫃(櫃)をとめ方(方)のと抱(抱)込(込)おこんを身(身)受(受)せねばもらぬと悦(悦)んで奥(奥)へ入(入)向(向)ふより野(野)寺(寺)の兼(兼)松(松)(松(松)助(助))治(治)藏(藏)(断(断)太(太))を連(連)て出(出)て來(來)り姉(姉)の方(方)のに逢(逢)て五(五)十(十)兩(兩)金(金)と借(借)ねばならぬと治(治)藏(藏)に呼(呼)出(出)させ無(無)心(心)を云(云)掛(掛)れと方(方)野(野)(左(左)團(團)次(次))の堂(堂)しても貸(貸)さず兼(兼)松(松)の死(死)をねばあらぬと云(云)死(死)んでも貸(貸)ぬと云(云)お是非(是非)なく歸(歸)らんとするゝ奥(奥)より岩(岩)次(次)聲(聲)掛(掛)出來(來)り此(此)

五十兩を兼松に貸て遣り是とエバに貢を突出して吳と頼
 ひ方の承知する岩次の兼松の額の疵を見て堂したと聞兼
 松の宮川の事を隠して災難で貢にぶたれたと云是にて方
 のの腹を立悪イ奴でも眞身の弟疵付られたと聞ての魂念
 ち仕返しをして遣ると云兼松も悦ぶ岩次の何あしる奥に
 て一寸い呑ふと皆々奥へは入ふと云處にて此道具廻る
 ○新報筋書より出て居升が是より方のいおこんと連來り
 縁切の事を異見するにわこんの貢さんの私が大病の時命
 を助て呉た後こちらから惚込色に成て貰た義理が有から堂
 でも否だと斷る處が有しが二日目に漸幕めて其後二三日
 にて幕數多よて仕切す此處を預りあするなり
 ○福岡貢宅の塙玄關口より座敷廻り注連と張たるの師の
 内の掛り爰よ千次郎(家柄)手代市藏(八百藏)下男正助(一
 團工門)扣へ居て貢様へお隣の太々へ参り升たが御出の
 事を申升た故只今歸り升と云て居處へ貢(菊五郎)出來り
 挨拶する兩人の先日宮川で盜難に逢取れ升た百五十兩と
 御用立下され添けなし借用 証文と認めて参り升たと出
 すを貢の後得意と申平生御世話に成御内の事はに及ぬ
 と返す是あて兩人の参詣は参ると下手へは入爰へ向ふよ
 り津村右太夫(霍藏)悴左司馬(荒次郎)朝熊方之進賢の胸

六門藏)出來り内への入久井家にて名刀を好まれ福岡家
 の青江下坂の刀を所望に付内見お参つたど貢が下坂の刀
 買入なしたの遊里の金に遣しと思ひ是を答よ貢を遣出さ
 ん企にて來りしお妻おさき(まう調)伯父磯貝典益衛門(一
 左團次)(菊之助)のいせ参りに荷物を持せ出來りおさき
 の藏より只今持参せしと刀箱と見せる三人の當が違ひ然
 らば借用致し度と云後刻返事致すと三人を妹お梅案内し
 て連で行爰へ伯父典益衛門出來りそちが買入をせし下坂
 をおさきが身の廻りと替りとして請出し其方が難儀を救
 ひしかり斯此眞節ある妻を捨置女郎に魂ひ奪はるゝとい
 不持者と異見する貢の全く遊里の金遣しならずと宮川
 の次第を語り平生の報恩に刀を買入なし用達し也と正助
 を証據に出して云譯すれと聞入す然ら証書を見ろと云其
 証文の取ぬと争ひ居處へ門口より千次郎主従歸り來り証
 文を見せる是よて一同安心する先刻の侍の右太夫左司馬
 共出來り返事を聞ふと云貢のならぬと云方の進きゆと成
 處へ(菊之助)出てあの侍ひの宮川の渡場でおれに錢を呉
 た巾着切のをぢさんだと云是にて三人の化が顯れると思
 ひ早くは逃て歸る是より貢の伯父の異見妻の眞節に感
 じ古市通ひを止升と云一同悦ぶ處にて幕

○團右衛門岩次の一通りなり二役下男正助へ篤實な親父役相應の出来併しとしたる役のよし 下男と役割に有に袴を付てふる侍ひに役を替あされたか但し御師の下男の斯か

○霍藏喜多六の常体あり二役津村右太夫の出来の評よし拵へ万端分なく一通りに仕て居内は憎味と可笑味が有てとんだ上出来よて感伏し升た

○松助兼松の産の道樂者と顯りして此丈の持藝さらしくとして軽い内に悪味と甘味が有て感伏

○家橋八百藏の兩人の拵へ旅の逗留中と見ゆる好見へて吉索足に麻裏草履をはいて居れしは請升た

○左團次万野の能のまり升た拵へも分なくせりふもいせ詞甘い事遠の大坂胤の産神と見え透升た二役磯貝與左衛門の伯父役例もかやうな老役の手に入てふる故分のケ處なし

○源之助貢の妹お梅あどけなき娘の好み大請着付の好み帯の取合もよくしたる役も亦荒次郎が兄を打擲せんとする處へ出ておぼえ迄の役ながら中々能して居れ升た○門藏の胴六僞侍ひの拵へ分無大出来齧太郎の治藏は通りあり○まげ松の茶屋女房例もあから出来吉登美松

○わやめの評先の通り

○荒次郎朔左司馬はまり役よて吉

○まら調貢妻おささとまり役よて分無人品も吉拵万端分無さして役も無れと評よし○おささと役割に有て舞臺でいおていと云どつちが本どうかと投書に有升たが「戀寐」の方お貢云名付紳と云役が有升からさかきのをぬいてさとしたが作者のはたらきさればおささが趣向が有とうけ升た

○菊五郎貢の拵へもよく仕打万端行届き升た大出来胴六に刀と内見させんと引抜突付る處の小氣味能て大に吉口千次郎市藏兩人參詣すると首時御幣を持出し消めて遣るのいせの風情有て請升た

○福助おさしされいゝ拵もよし

○三幕目古市油屋の場内證の道具爰へ岩次喜多六亭主お達ふと出て来る(竹治郎)(升藏)の若い者付て来り色々をだめる兩人聞か亭主清兵衛(家橋)達升ふと出て来る是方岩次のおこんの身請をせんと云清兵衛のおこんの子飼の時分有て見せの爲お成物敵本人の好た處で無れば身請いさせぬと云是を聞岩次もくやしがり此間吳た目貫を返せと云清兵衛の篋筒の引出しを出して返す岩次喜多

六兩人是からヤケ酒を呑で遣と二階へ行此跡へおこん(源之助) 出来り只今の御深切蔭ふて聞て嬉し涙を溢し升たを禮と云清兵衛も傷寒を煩つ時貢様のお影で命を拾つた事も有故御恩返しに妾よでもあさるなら只上る氣だ此様お情の詞を云聞せサア、泣顔直して坐敷へ行とおこんを立せる爰へ小ぢよく(友松)出て旦那さん岩次三が、「まだ思ひ切んなさらずへかい、ハ肩を叩て呉と此道具廻る

○同じく二階座敷の場福岡貢黒の羽織着流しにて出来る仲居(登美松)とじめ(橋次)其外大勢よて能お出さされ升たと云今宵のおこんに達度物じやと頼バイ、畏り升たと(登美松)立ふとする處へ(竹治郎)(升藏)の若い者出で今日阿波のお客の揚話でお達せや事の出來升ぬと断るさう云事やら仕方が無いと歸らうとする處へ万野出て私がお達せや升と是より兼に案内させ貢と下の小座敷へ遣る此跡へ岩次出る方の岩次に工みの次第とさやく岩次悦び中々作者も及ばない「余り油がすぎ升ふよと此道具廻る

○同じく小座敷の場爰におまん貢住ひ居て獨吟の唄よておんじくおこん今宵お招さやた、且那三の情のお詞決して外へ身請いさせぬと仰故夫とお咄しや悦ばさふとてと云貢の又伯父妻の貞節を云當分得心して切て呉と頼むおまんも義理おせまり當分別れ升ふと泣伏奥におさし出て様子い残らず開升たも二人様無つらぬ事と云んせうと泣緩りと咄しとさおさんせと慮と灯りを消貢の灯りが消たか付て呉ると云「ハア咄しに灯の入ぬわいな、おさしの次へ行又唄に成色もやうみ成上手の切戸口より方の忍び出來りそつと貢の紙入へ金目貫を入庭へ紙入と胴巻を捨る此物音お貢のおさしかと聞返事の無い猫でも有かとおこんの下を解く此もやうにて道具廻る

○又元の廣間の道具に成爰にて岩次のおれが大事の紙入と百両を入た胴巻が無なつと騒ぐ方のを呼で吟味をしると云是より下座敷に貢さんが居ますつたと若い者に呼に遺紛失物の事と語り氣の毒だか駄を改めさせて呉と貢の帯を解せ改め又紙入を改める中お目貫出る是は貢の盗賊だと岩次喜多六左司馬大勢替る、悪口する貢の一向覺無と云され共目貫を証據に万の散く、悪口する溜り兼て立掛るサア切んなさんせと駄を突付る爰へ下手方兼松出る岩次の能處へ來貢をよてと云兼松の煙草盆を以て打ふとする處へ(家福)の清兵衛飛で出兼松を突退おれ

がぶせぬ大さにお世話だと叱り是より貢に跡で分る様に取調升から今宵のお歸りなされとなだめて歸す貢の無念をこらへ腕組しあがり歩行内に道具替つて二階を下る跡へ方の出る續で兼松出て姉五甘く行たき是より又金の無心と云定家の御書と万野に預けて五兩借る處にて幕

○此道具廻りて貢の内の場に成貢の内へ歸り余所あから妻妹に暇乞の盃する處ありしが幕敷多く仕切す殊に彼是しての十八切に成息込薄く成とて三四日見せて預りに成

○左衛門次の方野の意外の大出来拵へも半分あく一寸色氣が有て憎つ振分なり感心く貢が人を殺す氣に成も此方のより起る筋故いせ音頭の前立敵とも云るべき役前なり斯の出来舞と思ひしに看客に感と起させ升た甘伏くいせ中で評判の能男貢さんと一處に死ねば本望だ浮名もうけに死にまひよかト云處の憎味大出来く口是で腰から下が男の様で無つたら十分あるに併し敵役だから見悪さも薄くて一徳日前の處へ鍵を下てムつたの請ました

○家橋亭主清兵衛の相應も出来されとまり役にて評吉内証の場半袴付の着附是も至當か後に坐敷へ出る時紋付の羽織を着て出られしに宣つた併し大層あもうけ役にてお

仕合

○團右衛門○霍藏の通常の出来

○源之助おこんの大役故如何と思ひしに中々能して居れ升た相手が六ッかしやの大將故随分指南されたと見え點の打場も無拵へ方端好よく色氣も十分有て上々評あり去あから例の「懸腰刀」のおまんが余程仕業も輕い方あり何の然れ梅幸の合方にて格別の見劣りも見ぬの手柄と言べし口然し荷の随分重いと見え升た役敵が悪口する時一々其人の顔を見留るの捨ぬ仕打と感心

○福助おさし出来吉一体子柄が能品拵が有丈強身拵へ方端好よく茶席の場灯りを消て「咄しに灯り入ぬのいさ」の處見物を嬉しからせ升た大當りく

○松助の兼松の前中通り上評此場の拵へもイキに成て猶宜見え升た世話物に無て叶ぬ人物で有升

○荒次郎津村左司馬出来吉○竹次郎○升藏の若い者の一通りの出来あり○橋次の仲居さしたる役もあし

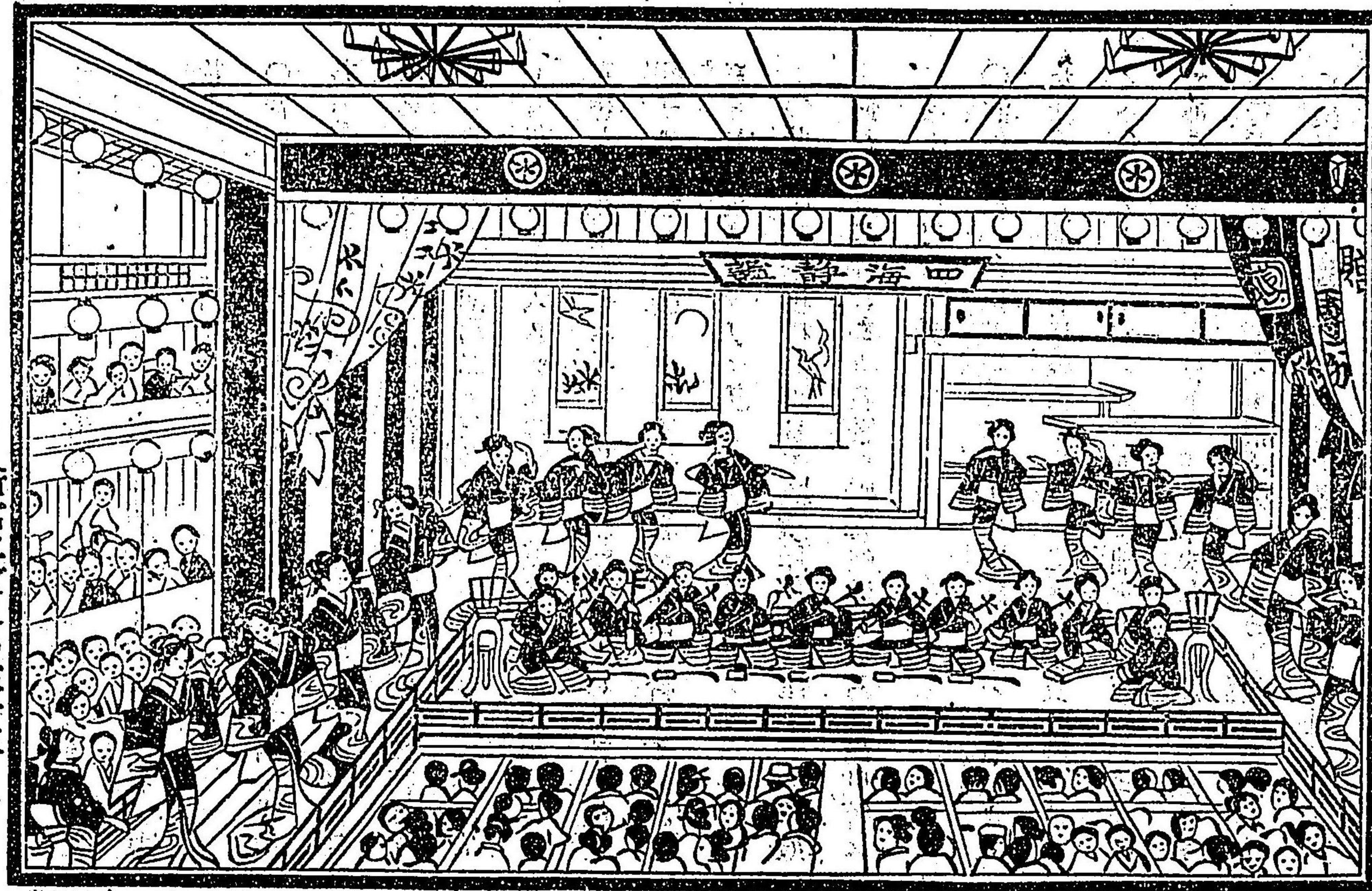
○登美松はじめ仲居みなくされいにて吉

○菊五郎貢の十分の出来今回ハ惣髮故少し色氣薄い様也しがそこの器用者の大將さらくと振事とした茶席の縁切咄の處りよく方の盗賊の汚名を付られての腹立の處

想
念
思



新富二六九め三十二



新富二ば九め三十三

いつめ相よく面白事で有升たわれでの切氣も成も尤もだ
と言評判ありし(一)越升)丈と此文毎度おから世話物で見
物を嬉しからせ升十八番く

○音頭惣踊りの場正面床の間に四海波静と言大幅と掛兩
花道正面三方へ朱塗の高欄とせり出し棧敷の二階より舞
臺の上へ丸に九枚笹の紋付たる燈灯を付幕明くと藝妓十
二人並ひ琴二人胡弓二人三弦八人地方にて音頭の唄に成
ト兩花道より十六人ツ、の踊り子踊りおから出舞臺にて
入替り兩花道へ這入拵へ黒縮緬へ盃流しの裾模様桃色
縹子の帯髪に地髪にて島田鬘花簪を差白半袴にて何れも
美事に奇麗き事でムり升た

○此連中新橋柳橋芳町日本橋靈岸島外神田下谷の藝妓
何れも別品揃ひあり名前ハ歌舞伎新報いろは新聞等に
委しければ略一升

○油屋表掛りの場花道が貢大小を差駈て来る暖簾口より
おこん駈て来り花道際にて突當おこんか、貢三か今頃と
こへ今方のと岩次喜多六三人おて咄を聞ば万のが斗ひに
ておきたを深い穴へ落したとの事夫故おきたへは知せず
に行處と言然らば万野を偽り爰へ呼出せ、是にておこん
の奥へは入引違て万の出て来る一刀切万野へ逃ては入貢

松も爰よて手を負逃て花道へは入是より大勢出て立廻り
お成左司馬出る片腕を切落される(荒次郎)ハ此腕と持て
花道へは入おから茨木の鬼の振事にて揚まくへ入道具廻
る

○同じく廊下の橋の道具に成爰おて岩次と喜多六を切お
さしが逃て来るに出逢水を呉と望むおさし震へおから水
さしを遣るおさしに早く逃ると言おさし下手へ逃てと入

○同じく湯殿の道具後の油樓の三階を書割た遠見爰へ眺
六治藏出て来り万のを尋る貢よ出合二人共切れる万のハ
浴室の内お出貢に出合立廻り有て切倒し止先を差懐ろの
定家の此書を取入る爰へおこん出る貢三能氣味でんし
たと言貢ハ涉書をおこんに渡し千次郎機お届て呉と頼腹
切んとする處へ亭注出て留て少しも早く此場と逃て自首
しろと進め落し遣る處よて幕

○此場の立廻り斗りにて爰も言て評する處おし殺されハ
も別而小細工もなく何れも血紅斗りおて無事あり荒次郎
の鬼の腕の思ひ付も此丈の事おれば只爰敬造の事也悪く
言も氣の毒なり何れも評吉

○左團次万のが先よ一ト刀切られたを白縮緬の下へにて
手當をして後よ出られしハ請升た

○菊五郎十八切も爰と言立る處あし只々大出来くと思
る斗りなり甘伏を仕打も無

○大切二見街道追分の場仕出し四人今夜古市の酒屋で人
殺しが有たさうだと噂しては入下手を千次郎市藏出来り
貢殿が人を殺しむられたとの事堂を逢度物と言て居處へ
向ふから人音がすると隠れる爰へ兼松逃て来り姉三の切
れたかしら何にしる浮雲事だと言後ろを兩人出て捕へん
とする兼松上手へ逃ては入兩人跡追ふては入此道具廻る

○鳥羽里磯貝與左衛門内の場貢の爰へ落来り門口の井戸
にて水と汲刀の血を洗ふ此物音に下女のみはま(登美松)
出来り此体を見驚く興へ知せ内へ通を伯母のみね(紫若)
の窓の戸を明て見て不審がる此内花道を與左衛門(左團
次)下男宗八(門藏)に燈灯を付させ出来り宗八の先刻貢
様にお目お掛り升たが血だらなよ成て顔の色も悪しと咄
す與左衛門の何ぞ子細有んと内へは入是を興の座敷まで
貢の物語りを聞勇氣能切腹しると言貢の下坂の刀と伯父
に渡し切腹に成此道具廻る

○大詰二見が浦の場兼松の大勢の漁師をかたらひ千次郎
市藏を討んと立廻り有兩人の此人數を退散す爰へ下男正
助(團右衛門)定家の書と持て来る千次郎の是を暗にて

見やうとする兼松の取うとするト、後ろの岩の間へ日出
る是にて千次郎の兼松を折敷此の書と見る市藏の讀升た
か千次郎の讀たと言此見え宜しく頭取出て今日の是限り
と打出しにある

○家橋○八百藏○團右衛門○松助共前の評の通り此場の
さしたる事なし○門藏の宗八分あし○登美松下女はま
白粉も付すさつぱりと能作られ升たが貢の刀を洗ふて居
様子を見て驚き様が大仰過升た他人で無難類の貢の事
あり驚き様にも次第が有升余り當込が多過升ふ

○左團次與左衛門の前にも評した通り役前とまつて中分
無でゐる○紫若女房のみねのさしたる役もあし通常あり
○菊五郎貢の門口から後の腹切迄分無大出来なり口門
口の處の宜つたが腹切の大きにダシ込升たナトくたく
敷やうで有升た口腹へ血紅をぬつて其下から血綿が出て
此間に白い處が見へたの見悪うムり升たどつちか片く
にあすつたら宜しむに今回の伊勢音頭の新紫の脚色能中
々な面白みて大當りでムり升た方今作物の新狂言に掛
たら向ふに敵無イヨ音羽屋の大長く

○市村座九月狂言藝評

第一番目 今文覺助命刺繍 五幕

一二の間の意延ぶよ 繪本太功記 尾崎の段
り中でべたき千成瓢

第二番目 月宴柳繪合 三組

○片岡我童(浪人狹原良作役阿部川町浪宅の場長病人の
体持へ万端分あく此役の思ひ切て作られていかにも病
人の様子有て存外の大出来でムリ升た○弟林之助の爲に
重代の刀を女房おさきに賣捌きに遣りしる三枝堀にて賊
難に逢て投身せんとせしを家主(壽美藏)も助けられ歸り
しに手話の難義よ及しを歎きおさきを折鑑せんとする處
の能こなされ升た○再度女房の投身せんと欠出したると
兄文治(菊五郎)が助て連歸り其上金の入道と聞て文治が
才覺を引請んと云よ悦べる、處迄分無でムリ升た口茶
の紋付の羽織を取出し着らるゝが林之助に二兩三兩の
惠みと請暮して居たと云にハト立派過りし升んか○須
田町文治の内へ金の才覺を案じ来る處も病人の情有て大
きによし馬入川の場より藤澤本陣の場迄手振あく能てあ
され升た先此役の若人お似合す万端おみに仕られ評よき

方かたで有升あがた

○文治子分ぶん於迦羅あにら幸次役さうじやく三枝堀さんしきほりの場仕事ばしごと歸りの俵合棒たわあひぼうの
清太せいだ(家橋)と連立つれたちての出爰でいの中間熊藏ちゅうかんくまざう(松助)と三人だん
まり摸樣もやうに成迄なるとの處故ところさしる事無拵ことなしへり相應さうおうにて吉文
治内の場かみの親分おやぶんの難場なんばへ來り林之助はやしすけ(家橋)の跡追掛あとおいかけんと
出行迄いこまでしたる事なし○大山瀧おほやまのたきの場ばハ(家橋)と兩花道りゅうはなぢの
出松明でたいまつと付割つけわりせりハの處宜ところムリ升た是より雲助くもすけを相手あいてに
立廻り有たちまわり有あり狩迦羅かじらの彫物はりものを願ねがひし幕切童子まくきりどうじの見得みえに成處
大出来で〜

○二番目に億川綱おとくがわ氏公役しこうやく序幕柳島屋敷じよまくやなぎしまやしきの場拵ばしごとへハ淺黄紋あさぎもん
付の帷子かたびらに黒紗くろしやの羽織はおり是にハ分有わりです出羽守でえびのり邸庭中ていぢちゆうハ花
菖蒲あやむの趣向しゆうかうにて門かどの柱はしらに五月五日ごごごより始はじると云聯いふれんと掛かけ
有ありよつて節句せつこの當日たうじつと見え升あがら羽織はおりの紗しやハ如何いかにな物
式服しきふくでハ紗しやハ極暑ごくあつの物として有升あがら結むすよしてはしかつ
た帷子かたびらも晒麻さらしあしの着升きたが縮ちぢむハ暑中しよちゆうで無なれハ着きお併しかし帷
子かたびらの襟えりでムリ升あがら十間じゆけんの白扇はくせんを遣つかつて居ゐられ升あが
是も殿中でんちゆうの白扇はくせんと云好このふしたふムリ升あがら人品じんぴんも將軍しやうぐんとい
貫目くわんめも見みえ兼升かねあがたが先大概まづたいがいな品格へんかくにてあらい難なんするも無
理成りなるべし○廓くわくの學まなびの可笑おかしも大鳥おほどりよこあされハ分無なし淺妻
船ふねの場ばハおみ衣こみせの拵しよらうハ衣裳いさうの粗末そまつの故ゆゑか何高人物なんたかじんぶつ品格へんかく薄

く不評でムリ升た○吹上御茶屋の場ハ年配も老拵へにし
て中々宜ムリ升た書御の時の(權十郎)が演られ評判ま
く當られ升たが此丈の先とまり役故見悪い處も無でムリ
升た○大切掃部頭諫言の場拵へ万端申分無短氣キミ合
も有て出来よし

○武藏屋徳兵衛役出羽屋の場も別宅の場も評よし拵へ
好よく材木問屋の旦那と急度見え升た近頃メキく腕前
を上られ浮雲氣さくあられたの甘心く

○河原崎國太郎(良作妻いささ)役此丈手の物の世話女房
故悪かろう苦もなし分無の出来でムリ升た

○坪内の後室慶壽役の品格も有是亦とまり役故分無

○二番目に老女岡本役御鏡口の場年配と言人品と言拵へ

万端申分ない由井侯の頼みにて大奥へ男子を入ると云思
入澤山寺處十分にこまされ升た是より袴袴の裾へ直純を

隠し御前へ運る處宜出来升た○御臺御對顔の處始終向ふ
へ氣を配り守つてムる處手抜さくこまされて請升た忍で

伺ふあさみ(猿十郎)を拵をもつて手裏劍に打釣出す處甘

ふムリ升た此役の最初(故門の助)の役にて評よかりしが
扇之丈中々見劣りあくて吉瀧の屋より篤實も風有て上評

○太功記に母皇月役人品も能拵へ万端分無少し若いと
言評も有しが此丈例でも老女役を仕なさるときの此難が
有升が毎度記者も升が何と云ても根が若い人故光澤
が有升と見へ升併し仕打が十分届き升故評の能ムリ升十
段目中で一等の出来との評○尤も十段目中で此老母が一
番役が有升故大事を役でムリ升上評といふ手柄く

○此場の中幕の管ありしが大奥の場幕切の由井侯の舞が
有によつて打出し都合が悪いとて此十段目が大切も成升
た知た事あがら一寸御断り申置升

○尾上松助(坪内の中間熊藏役三枝堀をかさき(國太郎)
の金百兩取が此狂言の種に成役此丈の跡にはまつた役に
て中分なし文治の内へ掛り合を付に來て葎入の中から出
た小判を見られ三枝堀の賊と云れる時知らぬへくと強
面に云あがら腹の中でのんだ事をした氣味が悪と云腹
を聞せる思入十分見えて感心○實は此丈の否に當込杯を
仕さざらあくつて節々の處を答へさせる世話敵にいあく

てあらぬ一方の大將あり○瀧の場ハ文治は捕へられ白狀
しあけりやア斯だと瀧へ突込れ天窓から瀧をわびて本水
でびつしより瀧る處の小氣味の能仕打でムリ升た大當り

○澤村訥子) 坪内の用人倉澤矢一郎役中分無出來され升
 た○菅沼主水役綱氏公へ諫言の處評よし忠義一圖の侍ひ
 あるに顔の作り着付の好み突轉一染へ處の中分有升た
 ○旭原式部役掃部頭お手討を止めに出る役さしたる事無
 ○十段目に加藤正清役大詰に出らる、迄故評よし
 ○相藏) 刀屋佐兵衛○遣り手の老女二役共通常○翫太郎
 坂倉の掛合人さしたる事無○臺屋の侍ひ可笑よし○乳母
 おたよ出來吉○時五郎) 廓の學びに辻占屋評よし
 ○市川新藏) 寄の悴與吉さしたる出來よし○茶道春齋淨
 るりに坐頭の後出來升た
 ○坂東三津三) 柳島の養女お高役柳島邸の場お春木坐出
 働の都合によつて間に合す(歌女之巫)が代り有升た吹
 上お茶屋より出られ升たさしたる役もムリ升んが拵へ方
 端中分あし上評の方
 ○尾上菊之助) 文治妹おたき役此子の調子の悪い性から
 の思ひ付めて噫にした五趣向拵へ杯の中分無ですが一休
 上出來とい行ませるんだ○道具を持たり手真似にて咄し
 をする趣向文治が歸つて留主に誰ぞ來たかと聞と弟林之
 助が來たと云仕方に酒をつぐ真似をして佛檀のリンを持
 て來て叩て見せる(梅幸)の考へて、ア弟林之助がと聞

處おれだのら分るがだれにも分るめへと云れし可笑ふ
 ムリ升た後不動の利益おて病氣が直り口がさけると云役
 仕打の万く能てあされ升た

○中村芝翫) 柳島の家老利根權太夫役書おろし(仲藏)の
 役にて評よりのし芝翫丈での堂も悪法を書て出羽を助け
 たと云人物おの見へず併しお間に合せに立派にて納つ
 て居升た妾立田(松之助)と問夫の真似をして見せる處の
 愛敬有つて可笑ふムリ升た

○おりの兄雷五郎齋役是又(仲藏)の役にして圖抜に宜
 つた役にて(今に目先に殘て居升)到底成駒屋に無理
 なる事を知れており升が拵へ万端の道に好よく遊び人と
 見られ升た甘心く

○十段目に武智光秀役毎度演されて手覺の事故中々能て
 あされ升た何にしる大舞臺にて立派故感伏しあかつて
 も見て居て能心持の人あり近年の數の内より出る時見得
 もあつぬつと出るのが流行するにそこの此丈齋風然と笠
 を取て大見得が有升の愛敬く併し割る程成駒屋くと
 聲が掛り升からヤハハ此方が劇場らしくて宣いか○是よ
 り後の處の光秀一通りのゆき有合の振事と升か何の
 然れ(三升)の向ふへ廻して貫目の落ぬ此丈中々一方の

未立者は成れ并な愛敬の問屋く

○尾上菊五郎(今文覺)に駕昇不動文治役阿部川町の場姉
のおささが身と投んとするを助ての出拵へ方端五分も透
ぬ好み良作に逢て事の次第を尋ねし處重代の刀賣代あし
だ金を盗れし落度の由を聞其入用の金ハ林之助が引負の
つひのびとの云ハ實ハ良作を助た金と知れたる故弟と助
其ハ義理が立ぬと切羽の次第を聞其金の才覺を五日の間
に拵へると引受る發端の場梅幸丈の身上おはまつた様に
新案したる筋故中分少しもあく愛ハ只さらくくと吉とす
迄の事○同じく内の場ハ諸方へ金策も行ても才覺出來ず
思案最中へ清太女房おつる(登美松)が來り坪内様のお姫
様の文を持参し見て呉と云ふ自分の心配お手にも取らず
置しとマイと讀でより悪法を考付わのお綱が手引にてお
國行の時不義をしたお姫様を種にコリヤア道からぬ事お
がらと氣が付駿河臺へ行と云場さして評する處も無です
が此丈の事あれハ諸事へ行届てや分なし○坪内邸の場ハ
用人倉澤(訥子)へ頼み込だる處お姫様の此事が露顯して
兄上へ濟ぬとて自害して死ぬる文治ハ不義の合人故手討
にすると殿の御前へ引出される處自分ハ飛た事に成たと
覺悟あし度胸を定め手討にあらんと肌を腕腕込として死

を待處カシイ仕打にて宜つたぞ○脊中の彫物不動尊なる
に殿慶十郎(高助)も我信仰の尊像に刃の當られぬと不斗
お手討と助り悦ぶ處甘い事でムリ升た是よりお姫様の追
善ありと髪を切願の尋に付金の入用の手續と語る處
萩原真作ハ坪内の知己ありとて金百兩を恵んで呉る文治
ハ金を賞悦んで立歸る同じく内の場ハ金と持て歸り來り
母に見せ悦ぶ留主ハ林之助様が來たと聞置手紙と讀西の
國へ行と有驚く處へ阿部川町の合長家の者來り良作殿
夫婦が家出したと知せに來る是を聞母親ハそんから娘も
死に行たかと氣を落しわしも死て仕舞と云愛へ小澤(松
之助)入來るヤア先刻お姫様の死んだ筈イ、ヤ自害した
と云しハ母の偽りわしを愛へ置て呉と云夫があらすハ死
と言折角才覺した金も今でハ元コリヤア堂したら宜ろ
ど一時は逆上て耳が聞へあく成○母親盲目(壽美藏)妹口
がさけず(菊之助)文治ハ眞にあり是で三人片輪に成と音
趣向愛へ清太(家福)幸治(我重)來り替々手分してさがる
んと出行處にて幕此場の都て梅幸得意の狂言故中分の處
少しも無口齧を切て散し髪も成て居が邪广なりと刺刀に
て毛を切るが栗坊主に成鬘の趣向ハ大請でムリ升た○大
山大瀧の場正面に本氷の瀧を見せ左右岩組の好み目を驚

かす斗りの道具梅幸丈知恵をふるつて誂へられた事故見
 事を凄しい機軸仕掛の實は感伏し升た○瀧へ掛る振事から
 單物の好み鼠微塵が自然と鼠の着物に見える思ひ付迄一
 々請升た○兩花道より清太幸次明松と付尋ね来る處吉是
 より中間熊藏(松助)と捕へ悪事を水びさしにして白状さ
 せる處の實に氣味の能趣向でムリ升た口ト、三人並んで
 不動神迦羅制吒迦の彫物を見せる處も五趣向あり不動尊
 の見得に成幕切も茶番だ杯と言評判も有升たが趣向目新
 らしく大膽でムリ升た○三人の彫物も舊幕時代の鵜昇の
 風俗見へて能趣向と實に請升た併しおしい事には最早秋
 冷の氣候も成て本水の見てさへ寒氣と覺升た丈が殘念で
 ムリ升た○藤澤本陣の場坪内の旅宿へ萩原夫婦文治同
 道よて禮に來り長作の國行の刀を賞ひ文治親子三人の不
 動の利益にて片輪本服なし文治の妹小澤を用人倉澤が娘
 みして文治に見合せ文治妹おたさの林之助に添せると云
 一家和合の結局迄にてさして評する處なし○當狂言の二
 番目物に作た物ありし新富坐とかげ持の都合によつて
 壹番目も見せられて何か目的違ひ旁して骨折がひもさ
 く余りヤンヤと云ぬ役者の藝評の悪いので無全く時
 の廻り合せと見へたりおしい事かさく

○岩井松之助(慶十郎)妹小澤持へ万端や分無母慶壽に不
 義の詮議ふ逢處ばいやりと能出來升た文治の内へ欠込來
 る處も色氣有てや分無○此丈の娘形が大きにこまり能頼
 母しい事でムリ升師匠の跡を繼る様祈り升ぞや○柳繪
 合に柳島の妾立田役引手茶屋の女房に成て廊の遊びの指
 南番の處愛敬有て宜ムリ升た○朝妻の淨るりに小原女の
 さしたる事さし

○十段目に初菊役とまり役故大出來持へ万端や分なし口
 解の時逆上ると云思入にて耳たぶつばと付られ升たが
 大名のお姫様にて此仕打余り下品過て見惡し○此前故大
 小團次が八重垣姫をした時是をやられ升たが兎角劇場で
 い斯な事が折く有物でムるて苦くしい又十次郎出陣
 の時ちよいと留る振事の處にて手を廣げ手の平と後ろへ
 廻して妙な手つさを仕ささる堂云心得か斯云當振を退
 たら能初菊であるにおしい事あり

○尾上登美松(清太女房)あつち宜出來升た○市川金太郎
 茶道珍才廊の學びに按摩の役淨るりに犬の役共愛敬有て
 宜出來升た○坂東橋次(尾上竹次郎)多兩人共駕屋の若
 い者出來ました○岩井此糸(こし元八ッ橋)つとりとし
 てよし

○中村哥女之巫) 出羽屋の下女お千役大出来○市川猿十郎小村井軍藏森川主計二役共さしたる事無與女中あさみ役餅の可笑能出来升たステ、この蝙蝠を踊られ升るが大奥でいちト如何も思付なり掃部頭の相手に羅生門の鬼の振み成ての立廻りの甘い物でムリ升た

○市川善美藏) 今文覺み家主太次右衛門役阿部川町の場良作夫婦に深切の取扱ひ始終手軽くしてムる様なるが可笑中々宜こなされ升たが少し騒々敷氣味合に見へし何何○文治の母ひとり役盲目の振事能出来升た相替らす何へも調法に能行届きて夫々仕分られ評よし

○新庄備後守役綱氏公の供して柳島の邸へ來り始終一物有仕こあし今一息大場お仕ておしかつた人物もあしくヤツト請兼升た

○船頭長次役出羽屋の内にて徳兵衛の素振をわやしと一寸とくづき祝義を賞ふ處手軽くこあされ評よし

○大廣間の場掃部頭のい手討を止めに出る譽田何某役さしたる事も無新庄と同じ役りと思われしました

○坂東家橋) 駕昇制陀迦清太役拵へ万端分無三弦堀の場い幕切へ出る斗り故さしで見る處なし○瀧の場(我童)と兩花道の出見劣りなく兩花方共ヤベら出逢大さあき役も無れと分るくこなされ評よし

○十段目に眞柴久吉役とまり役故分無れと坊主の間が余りそとく仕過るかと思われ升た今一息添付て手軽く遣つて賞たし大詰の見出し拵へも鏡出立を凝して直衣好みに仕られたり寛仁大度お見へて大きに宜つた殊に貫目も備り大出来あり

○市川團十郎) 柳繪合に柳島出羽守役此前も仕當られたる役故分あし將軍成の場拵へ万端分無菅沼主水の諫言と取つくりひ歸し綱氏公を庭内へ通し何も云す又向ふを見てニツコリと笑をふくむ斗りにて腹と聞せ道具替りになる處の此丈の十八番何となく感心し升たふしぎく廊の學びにふられた客にあらるゝ處のさしたる事無淺妻の淨るりに船頭の役拵へも好み面白く分無一寸扇の手事甘い物でムリ升た

○出羽屋忠五郎役の先年も仕られ升たが今回の何だか年配に成て分別くさく前の方がとるかに能かと思われ升た其上に五郎藏も此前よりの悪く成た故が搭別面白味も無

感心しません事でムリ升た

○由井掃部頭役さて此直純役の先年も大當りありしが今
 回の一層油がのつて感伏を出来吹上り茶屋の場將軍より
 物頭のだきの相談を掛らるゝを空耳をとしらせる工合の
 處へ何共云ぬ程の出来外に仕手をし感伏く拵へも半分
 かし大廣間の場は具足開の古式を改められたを強諫の處
 へ例もあがり手に入れた物にて一點の半分無○は側の者が
 彼是と口出しをす時たまらッせへごますり共」と言れし
 が此詞言語同斷大不承知と思升大老職をも驚る大名がこ
 まをする杯と云下等詞の遣ふ咎あし尤も此せりふの歌舞
 伎新報の筋書に出て居升から(三升)丈の知つた事でも有
 升舞がトヤせば此丈の關係無様なれと爰に氣の付ぬ役者
 も同罪と云べし此前新富坐で(仲藏)が師直の時も言れし
 故評判記へ小言を記て置升たが兎角斯様な事いつかり
 と作る物にて殊に藝人社會にて専ら平生用る詞故出る
 事と見えたり己來五注意願たし○又上様より刀と下
 さるゝ時ハツト恐入十分思入有てニシリ寄式のごとく頂
 戴され升が此長い間上様の刀を握んだ儘手と延してムる
 の堂も体載が悪い様に思われ升實際に成たらどんお物か
 上を煩のす様よ見へ升で感伏せず(イヤ我童と團十郎を

ら我童が選れて居るが尤もだが爰ら活歴吏と來たら必
 得の有度處あり○は前を下りあがら天下の大事にいかへ
 られぬと云思入有て御法を破りても御臺所は對顔と願
 つて事を斗いんとは銃口へ廻る處老人の足取り實は感伏
 是より岡本の局を呼出しは逢を願ふ處請升た局の柄襦の
 裾へ掃部を隠し大興へ通す處吉○は臺處は對顔の處の何
 も仕草も無れとせりふに意味とふくませ腹を聞せる工合
 實も何共たどへ機軸く閨老の忠實見えて思はず感涙を催
 す斗り息も付ぬ面白味でムリ升た○扇面と頂き哥の吟じ
 様も甘しは盃の頂きぶりも尤ものこなしでムリ升た夫よ
 り出目度舞て立と云れ羅生門の舞に成處の無類ノ今回
 へ此大興限りにて石置場を見せぬ故筋が解せずおしい事
 でムリ升た先かやうお事をさせたら鬼でムリ升ふて
 ○打出しの都合によつて大切へ十段目が廻り珍數操の
 役を勤められ升た拵へ万端通常にズヤ分あく先押出した
 處光秀の奥方と云品搭備り正眞の女形でムリ升た扱仕方
 の無物にて何の仕草もなくして居るゝ處の堂も氣の性の
 名代で勤て居るのかと思ふ處が見え升る「現在母御を手
 ん掛て邊りから狂言の有處に成と十分に仕て見せられた
 故見蒼が出て來ました上手にして退たとい云るゝがお問

あ合せの雖ののがれず

○助高屋高助) 今文覺は坪内慶十郎役此丈にそまり役ゆ
る評よし旗本にハ立派過らせぬかと云評も有しが品ハ味
に持て生れた物故よん處あし仕打に於てハヤ分無手討に
せんさ文治と引出させ國行の刀を振上て不動ハ我信心あ
りどて助けて遺處能てあされ升た○此跡ハさしふる狂言
も無れば見答への處あし

○柳繪合に柳島奥方おさめ役新狂言の時ハ(半四郎)みて
大當かりしが高賀丈も相應にて評ハ能りしが色氣十分あ
らずおし事ハ口廓の學びにおいらんにて出る處持へが
此丈一人綿入持へハ堂云物が仕掛のフキの厚綿ハ請兼ま
した淺妻船の所作ハ衣装の好十分あらず何高不評

○出羽屋女房かりう役此役ハ(故半四郎)のが大出來ふど
此狂言の三役の内ハ二役ハ高賀丈でもお茶ハ濁せ升が此
ありう斗りの請兼升た一体杜若の跡を見て作た狂言故何
分立役の人が仕あされてハ無理あり何も爰と云て仕草も
無只容貌と見せる迄の役なれば此丈が幾等氣張てもダメ
でムリ升ふ(半四郎)のハ武徳が亭主の肴のを承知で不義
とするのが尤もの様に見へ升た物あり是らハ全く高賀丈
が悪いのでハ無杜若丈のが能のあり

○御臺探の前の其代り人品備り大出來でムリ升た拵へも
ヤ分なし大請く

○十段目に十次郎役此若衆形ふしぎに美しく感心に宜
ムリ升た拵へもよく仕打もヤ分の處さらに無大出來大當
り手負に成て立歸り親子別れの處も應へ升た今回の二番
目ハ加役斗りの處此十次郎と見せられ又若返つゝかど見
物ハふしぎがり升た女形の大役が間に合とハ實ハ重寶の
人然れば無て叶ぬ一方の大將く

高須高燕
撰者 梅素薫

補助 六一總連

○此處にて廿号の正誤を記し升靈岸島何某と云ハ名前の
投書にてハ忠告に預り升たハ中村仲藏の位與上上吉でハ
有舞功上上吉が至當で有ふとのお正しふムリ升た成程五
尤もの仰にてハ八文字舎の位定に大上上吉○眞上上吉○至
上上吉○功上々吉ハ同位にて大ハ花○眞ハ實○至ハ實同
様にて少し日くの有部○功ハ方今の仲藏丈の様なる全く
年功の役者も付て有升ハ記者もゆく迄心得居升たるに心
付ずして眞の字を冠らせ置升たハ一生の誤り然るを懇ろ
おハ教諭に預りありがたく謹んで己來ハ功の字と冠らせ

升事に致し升階此上とも粗漏ヒコウの事ハ、何卒見捨みすてせ
投寄たうりせらん事を希望ス 記者敬白

投書家人名

- 琴通 舍 立見小僧 壽喜田
- 土間野小市 麻布三公 千かり
- 有山紅楓 村松調 並木仙子
- 五蘭庵 越雪人 伊勢屋某
- 尾登羽矢

明治十六年五月一日御届
同十一月十五日出版

定價拾五錢

日本橋區堀江町 貳丁目二番地平民

編輯兼團扇 出版人密柑問屋 植木林之助

京橋區銀座貳丁目拾二番地

印刷所 愛善社

大 日本橋通三丁目 丸屋鉄次郎
八丁堀中町 山 本

賣 室町三丁目 秋山 武右衛門
大傳馬町二丁目角 三宅半四郎

捌 淺草黒舟町 梅 素 亭
淺草瓦町 森本順三郎
所 兩國米澤町三丁目 深川屋良助
人形町通長谷川町 武田平次

府縣賣捌所

- 尾州名古屋本町八丁目 岩田屋 芳兵衛
- 横濱吉田町二丁目 平野 傳太郎
- 駿州静岡江川町 杉本 平七

大日本 古今名婦鏡

一册 定價廿錢

近日賣出し

